

橋本コラム トールのトーク

ジェンダーギャップ指数をご存じだろうか？

各国の男女格差を0から1の間で表したものだ。1に近いほど平等な国といえる。世界経済フォーラムから2006年以降、毎年発表される訳だが、日本はなんと不平等なことかと驚かされる。

東京医大の不正入試は女性の点数だけを減点するという恥ずべき行為だ。

「なにそれ」と医者にかかる機会が多いぼくは思ってしまう。

格差の根底には家父長制度に代表される時代錯誤のいわば「おっさん思想」がある。

この思想から脱しない限り指数は上がらないね。

結婚子育てには男性もリスクを負わなきゃ。社会全体で子育てするさな。

アメリカに脅されて迎撃ミサイルイージスアショアなど買わなければ財源はあるじゃん。

最近では静鉄バスの乗務員にも女性が増えてきた。ぼくも乗る機会があるが一所懸命手伝ってくれるのだ。

一方で、女性乗務員は非力だ、と車いすで乗ることを躊躇するヘルパーもおる。

これこそが女性や障害者の社会進出を阻む原因の一端でもある。

「おっさん思想撲滅キャンペーン」やろうよ。

静岡障害者自立生活センター：橋本徹



ナレーションは春風亭昇太

主人公のイーちゃんは、当団体（介助派遣サービスひだまり）の利用者です！

おすすめ ドキュメンタリー映画

「イーちゃんの白い杖」

11月10日（土）～23日（祝）

静岡シネギャラリーにて一般公開！

問い合わせ：261-6115（テレビ静岡報道部）

“どんなに重い障害があっても
地域で共に生きる社会”を目指して！

NEWS



2018
10月号

発行 静岡障害者自立生活センター
(NPO 法人ひまわり事業団)

〒422-8006 静岡市駿河区曲金 5-4-58

TEL: 054-270-6380

FAX: 054-287-4922

E-mail: syoujiki@scil.jp

ホームページ: http://www.scil.jp



「歌舞伎助六図」(左)、「打ち上げ花火」(右)

～ともに切り絵の本から～

★細かくていねいに頑張って仕上げました。

作 それいゆ就B 千田桜子



今月の目次

報告：清水七夕祭りお出かけ（放課後等デイサービスらるく）	2
企画：THEちゃれんじ！それいゆメンバー改造計画に挑戦！	4
連載：サポーター×サポーター 林宏隆×木下孝洋	6
特別寄稿：津久井やまゆり園事件に思う事 大滝英史（相模原市在住）	9
連載：ひまわりヒストリア 1984年静岡に初めて「ひまわり号」が走る	10
橋本コラム「トールのトーク」その他	12



清水七夕祭りお出かけ

らるく職員ですっと考えていたことがあります。
それは、



らるくイベント外出企画！です。

何かとイベントがあっても、学校へ行っている子供たちが平日の放課後に行くことは難しい・・・
なので、らるくは普段、土日祝が休みだけど・・・



思い切って開所して、行っちゃおう！

毎年らるくの子供たちと行きたいなあ・・・と思っていた7月7日（土）の清水の七夕祭りに行っちゃおう！
ということで、

7日（土）開所します！七夕行きます！！



心配していた天候もなんとか無事に行けることに。

利用者8名、支援員9名という、らるくかつてない大移動となりました。

11時頃に清水到着。

まずは銀座通り前で、全員集合で写真撮影📷
まだ午前中ということもあり、
いい場所で撮れました！



銀座通りを歩き飾り付けを見たり
短冊を書いたりしました📄



お昼はマリナート内でお弁当🍱を食べました😊



午後は清水テルサで行われていた
「2018 静岡障害者技能競技大会 アビリンピック」に行ってきました。
ネームプレート作りに参加し、みんな
真剣な表情で楽しく作ることが出来ました。



今後も月一回ではありますが、土曜開所をし、みんなでお出かけなど楽しみたいと思います。



THE ちゃれんじ それいゆ生活介護の巻

記 鈴木 香奈

それいゆメンバー改造計画に挑戦！！



久しぶりのちゃれんじ企画。今回は生活介護それいゆメンバーで企画を練った。そのなかで、周囲からは相変わらずの無茶ぶりが連発。街に出てフリーハグやヒッチハイクで各CILまで辿り着けるかなど…。言うのは簡単だ。現それいゆメンバーは、そこまでアクティブに行動できる人がなかなかいない。そのため、今回はメンバー改造計画に決定した。

過去の企画と比較すると無難な企画だと思われるかもしれない。しかし、この企画は以前から「やってみたい」という声があった。そして、その声の裏には障がい者が抱える心の叫びがある…。

今回の変身者はこの人！

おおはし たけかず

今回の変身者は大橋剛和さん(53)。それいゆでは父親的存在で、「タケさん」という愛称で親しまれている。テレビを見るのが好きで、驚くほどの物知り。特に芸能情報はタケさんに聞け！と言っても過言ではないくらい詳しい。今回の改造計画で、タケさんに白羽の矢が立ったのは、以前から服に関する悩みがあったのと、8月に誕生日を迎えられたこともあり、お祝いの意味も込めて…。



タケさんの悩みとは…

着たい服を自由に選べない！！
タケさんの服選びは、
自分で着脱できるものに限る！！
上はボタンがないトレーナーやTシャツ。下はベルトが不要なジャージやスエットばかり。さらに今まで自分で服を買ったことがなかったそう。これはタケさんに限らず、“障がい者あるある”だったりする。

オシャレを楽しんでいるそれいゆ女子に聞いてみた！！

介助者にどんどんお願いして着たい服を着ればいい！ M・Hさん

自分も親が買って来た服をずっと着ていたけど、今は自分で買うようになって重い鎧を脱ぎつつあるかな。H・Mさん

いよいよ改造計画スタート！！

まずは、みんなでタケさんをどんな風に変身させたいかインターネットでコーディネート画像を検索。実年齢の50代よりは若めでさわやかなスタイル、秋から冬にかけて着られる素材がいいと意見がまとまった。

40代 男性 さわやかコーデ

検索



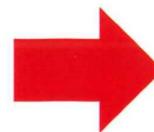
目指したのはこんな感じ



ミッキー柄のシャツを欲しがる
可愛らしい一面も♡♡

それから、実際に服を見に行った。今回はプチプラコーデを目指してしまむらとGUへ。タケさんは服を選ぶのに苦戦していたが、みんなと一緒に選んだ。そして…

Before



After



いかがだったでしょうか？

秋らしいさわやかなタケさんに変身した。

障がいを持つ方の中には、なかなか自由にオシャレを楽しむことができない人もいます。実際に私もかつて施設に入所していた頃は、同じような体験をした。

しかし、それが本当の自立と言えるのだろうか？

「ヘルパーに介助してもらいながら、好きな服を着る」、当たり前のことだが、今回の企画をとおして、そのことを再認識できた。

つづく…かもしれない(笑)。

サポーター×サポーター

林宏隆×木下孝洋

互いに支え合う、「利用者とヘルパーの関係」に焦点を当てる本企画。

第2回の今回は、静岡市初の『24時間重度訪問介護利用者』林さんと、
名実ともに林さんの『最大の理解者であり伴走者』の木下ヘルパーに、お話を伺いました。



林宏隆：s49.11.21 生まれの43歳。公称、筋ジスの奇跡。日商簿記一級(日本の簿記検定の最高峰。合格率10%!)の資格を持つ、ひだまり利用者きっての頭脳派であり、毎シーズンTV放映されるほぼすべてのアニメをチェックするアニメフリーク。スポーツにも造詣が深く、サッカーでは清水エスパルス、アメフトではデンバー・ブロンコス熱心なファン。また、食生活を豊かにするため、数々の調味料にチャレンジする『ドレッシングの求道者』でもあり、今日も新たな味を求めてAmazonを徘徊する。

木下孝洋：s42.7.10 生まれ。文学(特にミステリ)・洋楽(マニアックなアーティストにも非常に詳しい)・お笑いなど幅広いジャンルの趣味を持ち、それぞれに深い見識を備える、『目立たないけど実は知性派ヘルパーNo.1』。林さんにアメフトの面白さを教えた張本人であり、恐らく日本で10本の指に入るほどのNFL通。毎年、NFL公式有料放送に少なくない額をつぎ込む、クリーブランド・ブラウンズファンの51歳。愛妻家。



—林さんが一人暮らしを始めてどれくらい経ちますか？

林：もう20年経つね。1997年7月7日から。最初がその日。7が3つ、偶然だけど(笑)。

—お二人の関係は、その頃から？

林：少し経ってから。98年の2月位かな？

木下：もうすぐ銀婚式(笑)。

—当初から週に何日もシフトに入っていた？(現在は泊まりが週4~5回)

木下：当初は泊まりを週3。たしか、すぐにそれくらい入るようになった。

—20年間も変わらず、ずっと長時間シフトに入り続けている。

この記事には「利用者とヘルパーの関係の理想像」に迫ろうというテーマもある。お二人の関係はある種、理想的では？

林：いや、それは全然違う(笑)。

木下：違うね(笑)。

—でも20年も続くのは、理想とは言わないまでも、「何か」があるのでは？

木下：この人が利用者としてちゃんとしてるから続いた部分もあるかな。飲む量・食べる量を自分できっちり管理して、ヘルパーが間違えても自分で気付く。夏場でも冷たい飲み物は絶対飲まない。そうじゃないと、こんなに元気でいられない。

林：お腹に関しては本当に気を付けてる。

木下：どんなに暑くても、冷たいものは一滴も飲まない。ここまで自己管理してて体調崩したら、こっちも「しょうがないよね」ってなる。好き勝手がぶがぶ飲んで「お腹痛い」って言われたら、こっちも腹立つもん(笑)。

林：それだけはちゃんとしてるよ(笑)。

—他人のせいにしてないから、安心してケアに入れるってことですね。

木下：まあケンカも良くするけどね(笑)。

林：するする(笑)。くだらないことでケンカになる。

—ケンカですか。林さんの長生きの秘訣は、ストレスを溜めない事もありそうですね(笑)。

木下：ケンカになっても流さないで、納得するまで食い下がってくる。その気持ちの強さが、生きる意欲に通ずる部分があると思う。そこがすごく面倒くさいんだけど(笑)。

林：ごめんなさいね！(笑)。

—お二人の関係だからこそケンカが出来る。いつそういう関係が出来たんでしょうか？

木下：今はケンカしても仲良いよね。10年以上前、最初に死にかけた時の前はコイツ、本当に嫌な奴だったんだよ！(笑)ヘルパーにも断られて、泊まり入る人がいなくなっちゃって。

林：若かったしね。まあ言ってみれば黒歴史ってやつ(笑)。色々、余計なものまで背負いすぎちゃってたのかな。でも、あれがあったから今がある。何事も経験だよ。人生は間違いを起こすもんだよ(笑)。

—そういったことがあって、今のお二人の信頼感があるんですね。

—林さんは、ヘルパーに命と生活の全てを預けていることに、不安や苛立ちは無いんですか？

林：なんだろうねー。我慢とも違うけど。慣れたのかな。そうとしか言えないなあ、よくわかんないけどさ。

木下：林くんは、生きるのに貪欲だよ。まだ何か見たい、何か知りたいうのがすごく強い。「もういいや」ってならない。そうじゃなきゃここまで生きられない。横になりっぱなしの方が楽なのに、今でも車イスに移乗するし。

林：漫画が読みたい、それだけなんだけど(笑)。まあ主治医の先生も、大変でも体を起こした方が良いつて言うし。

—今をそのまま受け入れているから、前向きでいられるんでしょうか。

少し話は変わりますが、林さんがヘルパーに求めること、その最低限のラインはなんですか？

林：難しいね…。完璧に仕事ってだけでやられると、厳しいかな。特に長時間入る人は、+αがないと駄目な気がする。お互いの関係性だから、なんとも言えないけどさ。

木下：長時間二人きりだから、完全に仕事って割り切られると辛いかもね。あと、話しやすさ、雰囲気柔らかさとか？

林：そうね。まあ人によって能力も得意分野も違うし、細かいこと言ってもしょうがないから、やるべきことに一所懸命取り組んでくれば良い。あと、やっぱり人間関係だから、あんまり「ヘルパーと利用者」って考えすぎない方がいいと思うかな。

—あくまで「人と人」としての関係が重要なんですね。

木下：「林家の決まり」があって、ヘルパーとして入ってくれてる人が結婚したり、子どもが産まれて3歳の誕生日までは、林くんと僕の二人からお祝いとか、ちょっとしたプレゼントを贈る。

林：4歳くらいになると好みとか出てきて難しいから。大した物でもなくて、ちょっと笑えるような面白い物をね(笑)。

—お二人だけでなく、「ヘルパーと利用者を超えた関係」もありますね。

林：20年だからね。他の人たちも、その二人なりの関係性が、色々あるんじゃないかな。

木下：僕らは、多分人生で誰よりも一緒にいる時間が長い。それで、偶然こうなっている。

林：でも関係性ってのは難しい。答えは無いしね。

木下：二人で作るものだから。障害者・健常者関係なく、人間関係作るのが下手な人もいるじゃん。

—関係性は、長く一緒にいれば自然に出来てくるもの？

木下：それもあるけど、やっぱり話し合うことが大事なんじゃないかな。

林：あと、なんかちょっと趣味がかぶるとか、あると楽なんだけどね。

木下：そうね。相手に興味を持てるといいよね。

津久井やまゆり園事件に思う事

大滝 英史(相模原市中央区横山・48歳)

2年前の事件で19人の方の尊い命が奪われてしまったことを残念に思い、ご冥福をお祈りいたします。

私も脳性マヒという障害を持っている身として、どこかで意見を述べたく、この紙面を貸していただくことにしました。

2016年7月26日朝、やまゆり園の事件の映像がテレビから流されていた。私は、ただ知人がいなくてよかったと思いながら、ボーっと観ているだけだった。

その後、容疑者の犯行理由が報道され、犯人の思いにどれくらいの中の人達が、共感しているのか私は怖くなった。

これは、私達の命について考えると、つきつけられた事件だと思う。

1970年5月29日、横浜で母親が介護を苦にして、脳性マヒ者の我が子を絞殺した事件があった。

この事件で、母親に同情的な立場から減軽や無罪放免運動が起こった。

これに対して、当事者達は、罪は罪として裁くように適正な裁判を要求したが、結局、懲役2年、執行猶予3年という殺人としては非常に軽い判決が下された。

自分達は、殺されても仕方がない存在なのか、と憤りと恐怖を感じ、声を上げていった。そこから、神奈川県障害者運動が始まったと聞かされている。

私達が、今までやってきた事は一体、なんだったんだろう。

私も、こんな事を言っておきながら、現に、日々、多くの方々に助けをもらいながら、生活し、働いているが、月に7千円しか稼ぐことができないし、守っていくものもない。

自分でも、何の為に生きているのか解らなくなる時がある。それでも、生まれ落ちた命を精一杯自分らしく生きていこうと思っている。

私は今、知的障害の人達と毎日、働いている。

職場で、どんな悩み事を抱えていても、彼らの顔を見ていると、楽しくて、働くことができちゃう。

それだけでも彼らの生きている意味は、充分過ぎるくらいある。

思いが、いっぱい、話が蛇行してしまったが、私達はきっと、何年かかかってこの問題と向き合っていく事になるだろう。

大滝さんは、かつて静岡市に在住し当団体の当事者スタッフのひとりでした(あの伝説のひまわり寮の最後の住人です!)。現在は、神奈川県相模原市で生活しています。今回、地元の機関誌に投稿した記事を、許可を得て転載させていただきました。



—関係性というキーワードが出ましたが、林さんにとって、木下さんの存在って何でしょうか。

林：えー何だろう。一言で言うのは難しい。うーん…調味料みたいなものかな(笑)。生活する上で、無いと困る。いないと困る。あと、一つだけ言っておくと、こんなだけ意外といい人なんだよね。意外と優しい(笑)。だから最後は信頼できる。

木下：そうなんです。優しいんですよ(笑)。

林：こういう、すぐおちゃらける所は嫌いなんだけど(笑)。

—逆に、木下さんにとって、林さんはどんな存在？

木下：真面目に言うと、友達としか言いようがない。ツイッターに投稿する時とかは、親友って言うから。まあ俺はヘルパ—辞めたとしても、しょっちゅう遊びに来ると思う。仕事だけだと思ってる人は、多分遠慮して来なくなるでしょ。逆に、これだけ長い時間一緒にいて、未だに「割り切った仕事の関係です」っていうのも気持ち悪くない?(笑)

林：逆にすごいよね(笑)。それは出来ないと思うよ。



—お話を伺ってひとつわかったことは、お二人の関係は、他人には真似できない(笑)。

木下：本当に偶然こうなっただけだから。

腐れ縁。ズブズブの関係(笑)。

林：普通こうはならないから(笑)。気付いたらなっただけ。まあそんなもんだよね。

木下：でもまあ、まだまだ生きてもらわないと困るしね。僕はもう絶対、どっかが死ぬまで辞めないし、この人も「あと3年は頑張ってくれ」って言う、「え?3年で良いの?」とか言ってくれるんだよね(笑)。

—林さんは実際、何度も死の淵を乗り越えている。

木下：何年前か、病院で本当に「こいつ、もう死んじゃうんだ」って思って泣いてケア出来なくなっちゃって、お母さんに代わってもらったこともある。でもその後も5、6年全然元気で生きてる(笑)。

林：あの時は俺もちょっとヤバいと思ったけど、なんでか踏みとどまっちゃった(笑)。

木下：10年以上前にも、病院で発熱して家族が呼び出されて、俺は交替で帰ったんだけど、携帯に知らない番号から電話が入って。

林：死んだと思ったんでしょ(笑)。

木下：それでちょっと泣きながら病院に戻ったら、こいつ、不機嫌な顔で飯食ってんぞ!「今日夜仕事入るんだから、休まないでしょ?なんで来たの?」って(笑)。

林：俺は理由わかんなくて、単純に「なんで来たんだろ」って思って(笑)。

—そういう話を、いま笑ってできること自体が、林さんの強さを示していますね(笑)。今日はありがとうございました。

—「地域で自分らしく生きる」を誰よりも体現している林さん、それを一番そばで支える木下さん。お二人には、今後も頑張ってもらわないといけません。

木下：ま、この人は絶対負けないでしょ。

林：まあ、これからもこんな感じで行くんじゃないですか?(笑)今後ともよろしく!

ひまわりヒストリア～あの日あの頃～

その3 1984年 静岡に初めて「ひまわり号」が走る

文責：奥村譲

静岡に、初めて「ひまわり号」が走った日

1984年の9月のとある休日、静岡駅のホームは、200人を超える障害を持つ人やその支援者、家族であふれんばかりであった。

やがて「ひまわり号」の丸い看板をつけた10両編成の長い列車が静かに入線すると、ホームにいる人たちの間から大きな歓声が沸いた。

一方、ホームの一角では、「走れ！ひまわり号」の横断幕を背に、実行委員長の渡辺正直（まさなお）が、高らかに開会のあいさつを述べていた。

このセレモニーの後、参加者たちは、あらかじめ決められたグループごとに車両に乗り込んだ。

ひまわり号は、ゆっくりと、目的地である御殿場ファミリーランドへと向けて走り出した。



「特別な一日」

これは、静岡に初めて「ひまわり号」が走った日の朝の光景である。

目的地に着くまでの間、列車の中では、視覚障害のアコーデオン奏者の演奏があったり、グループごとに歌をうたい簡単なゲームをしたり…車内あちらこちらに、参加者たちの明るい笑顔が満ちあふれていた。目的地に着いてからも、地元の青年団や商店会の方たちが、ステージまでこしらえて、さまざまな催しもので参加者たちを歓待してくれた。

まさに「夢のような一日」。

参加者たちの何人かにとっては「生まれて初めて列車に乗る特別な一日」、「何十年ぶりで列車に乗る特別な一日」であった。



ひまわり号運動とは？

ひまわり号とは、ひとことで言ってしまうと、「列車を丸ごと一日貸切り、障害者やその家族、支援者らが日帰り旅行を楽しむイベント」である。

これだけだと、一見、何の変哲もないイベントであるように思える。

だが当時は、バスにはリフトが無く、駅にはエレベーターが無い時代。町中がまだ段差や階段だらけの時代だ。

色々課題はあるものの、とりあえず車椅子使用者が「個人で、自由に」列車旅が楽しめるようになった今の時代とは大いに違うのだ。

1982年11月に、日本で初めての「ひまわり号」が上野駅（東京都）～日光駅（栃木県）間を走って以来、「ひまわり号運動」は、またたく間には全国各地へと広がっていった。

翌1983年には、群馬、京都、広島、愛媛など全国9ヶ所で。翌々年の1984年には静岡でも。そして2000年には、北海道から九州まで全国68ヶ所で「ひまわり号」を走らせる取組みが行われるようになったのである。

そして、この「ひまわり号を走らせる静岡実行委員会」の初代実行委員長を務めたのが、当時、静岡障害者自立生活センターの代表であった渡辺正直（まさなお）であった。

「いつでも、どこでも、だれでも」使いやすい公共交通を目指して…

当時、駅にはエレベーターが無く、車椅子の場合、階段を数人がかりで担ぐしかなかった。

改札口の幅は車椅子では狭くて通れなく、駅のトイレには車椅子対応トイレなど皆無に近かった。

もちろんホームと列車の間は隙間と段差だらけ。

それ以前に、駅までたどり着こうにも、バスにはリフトが無く、街はどこもバリアだらけだった。

そんな時代の中、1984年、東海道本線の静岡区域に「新駅安倍川駅」が設置されることになった。

既存の駅ならともかく、新たに設置されるこの橋上型の駅に、スロープもエレベーターも設置予定が無いということがわかり、俄然盛り上がったのが、「いつでも、どこでも、だれでも安心して利用できる公共交通を求める市民の会」運動であった。



当時の自立生活センターのメンバーが中心になり、静岡市中心部をプラカード片手に何度もデモ行進をした。マスコミからも注目を浴びた。

翌1985年に、この運動の成果が実り、安倍川新駅にスロープが設置されることになったが、こうした公共交通のバリアフリー化を求める運動とリンクするような形で、急速に広がったのが「ひまわり号運動」だったのである。

運動の広がりには、「福祉」や「障害者」の枠組を超えた、より大きな市民のネットワークが必要だ。

「ひまわり号」成功の陰には、当時の国鉄（現在のJR）労働組合に所属する労働者たちを中心とする幅広い市民のサポートがあったことを、最後につけ加えておこう。